

母校・県商校歌「海は光りて・・・」の由来

(昭和37年10月制定) 校歌 作詞 富田 碎花
作曲 齊藤 登(44回生)

母校より県商の校歌「海は光りて」の歌詞の由来について問い合わせがありました。本会歴史委員会で調べた結果次のようなことが解りましたのでお知らせします。

県商の校歌

1 海は光りてにおい立ち ここいわ走る歌まくら (※)

丘を舞子の細道を 結ぶ宇宙の大路線
あすの世界のうたのせてふなよそおいにいそしむ子ら
県神戸商業高校 神戸県商 県商

※ 校歌の一節『ここいわ走る歌まくら』は万葉集第8巻より引用されたのではないかと推測されます。

作詞を担当した富田碎花は昭和59年に逝去、生前の一時期兵庫県芦屋市に住まいを構えた歌人で兵庫県に大変ゆかりのある方です。

新県商誕生に際して校歌作詞の依頼を受けた富田碎花は垂水の浜を万葉集第8巻に重ね作詞されたのではないかと思います。

私達の県商の校歌を紐解くと万葉の時代から今に繋がっていること。歴史と伝統を誇る県商の校歌に相応しい歌詞に改めて感銘を受けた次第です。

なお、垂水の平磯公園には万葉集第8巻を刻んだ『万葉の歌碑』が建立されております。

万葉集第8巻

一 僅の歌一

石激る垂水の上のさ蕨の、萌え出づる春になりけるかも

志貴皇子

《解説》このうたは飛鳥時代から奈良時代の皇族・志貴皇子によるもので意味は次の通りです。

「岩の上を奔流する滝のほとりの蕨が、萌え出てくるうれしい春になったことだ」



